

国立療養所大島青松園 史跡めぐりと史料(4完)

「国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(1)」
『彦根論叢』第416号(2018年5月)

「国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(2)」
『彦根論叢』第417号(2018年9月)

「国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(3)」
『滋賀大学経済学部研究年報』第25巻(2018年11月刊行予定)

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

15 | 棧橋

1961(昭和36)年に木製の棧橋が鉄筋ブロックに改造された。現在までに、「大島丸」「かへで」「もみち」「松風丸」「浦風」「ふじ」「せいしょう」「まつかぜ」という名の船がこの棧橋を行き来した。／現在使用されている棧橋の南に砂防堤がある。2010年にはこれが高速救急艇「せとのあかり」用の棧橋へと改築された。

島に船着場はなくてはならず、大島には療養所開設以前から、なにかしらそうした設備があったはずだ。しかしそのようすはいま、大島に残る史料をとおして明確には伝わっていない。

療養所開設以後の大島の船着場をみよう。1932年4月創刊の逐次刊行物『藻汐草』通巻第1号は、目次につぐ巻頭口絵写真に、キャプション「写真は道府県立第四区大島療養所全景」をつけた1葉を載せた。おそらく南の山からみたその角度では、大島の西海岸がよくみえず、そこになにか構造物があるかどうかはわからない。同誌通巻第8号(1934年5月)も目次につぐ巻頭口絵写真に、キャプション「大島療養所全景(南方の山嶺より望む)」がつく1葉が載る。さきの写真と異なり、西海岸のちかくに高い煙突がみえるも、海岸線はみえない。1935年に刊行された『大島療養所二十五年史』(大島療養所)の巻頭口絵写真3丁めに、「大島療養所全景／北部山上より患者家族舎本館を眺む。」とキャプションをつけた1葉がある。高い煙突がみえ、西の浜の海岸線もはっきりとみえるが、そこに船が浮かぶのか、なにか棧橋として使える構造物があるのかまでは、写真からはわからない。

いまのところ、船着場らしい場所を撮った写真で、もっとも古いであろうそれが、『青松』通巻第147号(1959年6月)の巻頭口絵写真に用いられた1葉である。同号で「青松園50年史点景」と題された2ページのうちの1ページめに「島の足」と見出し

があり、そこにある4葉のうちの1葉に、「開所後20年余〔1930年代初めか——引用者による。以下同〕は棧橋もなく強風の日にはハシケが使えず交通、糧道ともに朴絶えた(昭和6〔1931〕年映す)」の説明がつく。写真は、矢竹島を後景に、船とボートを1艘ずつ前景におき、手前の手漕ぎボートに2枚の板が渡されている。このボートが舢舨か。『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』(大島青松園入園者自治会(協和会)、1981年。以下、『島昭和史』と略記)巻頭口絵写真のページには、「入園者を曳き舟で輸送したテンマ舟／昭和初期迄、沖合いの本船に患者は乗せなかった」のキャプションつき写真がある。そこには、「沖合い」に1艘の船、それよりもずっと手まえに10名ほどのひとが乗るボートが写る。それが伝馬船=舢舨だろう。この「テンマ舟」とさきの「ハシケ」とは同規模の小舟だ。

『藻汐草』通巻第37号(1937年6月)巻頭口絵写真に、「工事中の棧橋(西海岸)／左側の建物は大島会館」のキャプションがつく。ただし同号に棧橋についての記事はない。同第39号(1937年8月)の巻頭口絵写真が、「棧橋落成」(見出し)を伝える——「待望の棧橋が昭和十一〔1936〕年度の追加予算に計上されて今回立派に出来上り、七月十三日其の落成式を挙行しました。特に予算の少いところへ鉄材の暴騰で一時は実現さへ危ぶまれたのでありますが、管理県当局の特別な御取計らひと工事請負者の犠牲的精神によつて予定の通り工事完成を見たことは喜びに堪えません。このために今後危険の防止も出来又どれだけ将来時間の経済になるか判りません。御高配を戴いた関係各位に対し深く感謝する次第であります。」。同号所収「大島日誌」には、「七月十三日／棧橋落成式を挙行す。」(25ページ)の記述。巻頭2葉の写真は、「落成式場」と「全景／(於西海岸)／七月

十三日」(キャプション)とを写す。落成式は棧橋のうえでおこなわれたもよう。みがかぎりでは、現在の、ほぼ「く」の字、あるいは、おおよそ「へ」の字型とはちがひ、棧橋はまっすぐにのびていたようだ。

前掲『大島療養所二十五年史』巻末収載の「大島療養所配置図／昭和九年十二月末現在」には、西海岸の海につきでる棧橋が記されていない。そのつぎに刊行された園の公式史誌である『国立療養所大島青松園五十年誌』(国立療養所大島青松園、1960年。以下、『五十年誌』と略記)の「年譜」ページには、1937年の項に「3、31かねて建設中の棧橋落成。」と記載がある(46ページ)。同書挿絵写真で「四面海である大島の玄関は棧橋で、所属船は毎日高松港との間を往復している、棧橋に近づくまつかぜ」のキャプションがついたそれには、木製の棧橋が写っている。『島昭和史』巻末の「年表自治会・青松園関係」には、1937年の項に「7・13 棧橋設置落成式。」(320ページ)とみえる。これは、「開園50周年記念号」として編まれた『青松』通巻第151号(1959年11月)収載「国立療養所大島青松園年譜【編集部作製】」もおなじ。1936年度予算での設置だから落成は年度末の日付で、その落成式を翌1937年度に執行したということだ。

さかのぼって、同誌通巻第80号(1953年7月)に「新病舎地帯」「少年舎」「東海岸」とともに「西海岸」(いずれもキャプション)の写真が載る(12ページと13ページのあいだでノンブルなし)。ただし画質があまりよくなく、棧橋のようすはわからない(小舟とそれよりは大きな船が写る)。

療養所がある大島では、1937年によく「棧橋」と呼び得る設備ができた。

来賓の訪島を撮影した記念写真に、上陸時のようすが撮られることがある。1953年5月27日の池田隆政、厚子夫妻の来島記録として⁴¹⁾、『青松』誌上(通巻第80号、1953年7月)に掲載された写真

41) 池田厚子は昭和天皇と香淳皇后の第4女、貞明皇后の孫でもとの名は順宮厚子内親王。池田隆政は数えればかつて岡山藩主だった池田侯爵家の第16代当主。

が7葉あり、その第1葉のキャプションは「大島中央部」。そこに写る大島西海岸は海岸線のすべてを視野に入れているわけではなく、みえるかぎりでは栈橋らしい構造物はない。

彼女の2回目の訪島は翌1954年6月25日で、それを伝える同誌誌上に海岸の写真はない(同第93号、1954年8月)。同人3回目の来島にさいして撮影された写真には、栈橋が写っている(『青松』9月号、1955年9月、巻頭口絵)。「栈橋にて」とのキャプションがつくそこには、木製とみえる手すり、かつて小学校の渡り廊下によくあった簀子をおもわせる栈橋なるものが写っている。1956年11月10日にも、「池田厚子夫人及び長島友の会1行来園。午後1時半よりみ恵記念式挙行。池田厚子夫人の土産鉢植3ヶを賜る。」(「園内日誌抄<10月21日～11月20日>」同第120号、1957年1月、46ページ)とのこと。同号口絵写真に、「十一月十日「み恵の日」／池田厚子夫人御来園」の見出しのもと、「四度目の島へ」「歓迎会場にて」「菊花作品展へ」のキャプションつき3葉の写真が載る。キャプション「四度目の島へ」の写真には、船を降りて歩くそのようすに栈橋であろう板が写っている。この写真はのちにまた、「昭和28〔1953〕年5月27日御来園以来池田厚子夫人は貞明皇后の御遺志を継承され、毎年患者慰問にお出で下さっている。」とのキャプションがついて、同第151号(1959年11月)収載の「青松園50年点景<誌上記録>」の1葉に用いられている。

「毎年お出で頂きこれで五度目だが、今までの白服から淡桃色のお召物に変わっていたのも何か親しみの度合いのように思われた。」(齊木「あとがき」同第128号、1957年10月)「池田厚子夫人が御来園」が1957年6月25日のこと⁴²⁾、同号巻頭口絵写真「池田厚子夫人御来園スナップ/<6月25日>」3葉に、栈橋が入る景色はみえない(「西海

岸の散歩」写真あり)。「六回目の青松園訪問」(池田厚子「お見舞いの言葉」同第143号、1959年2月)が1958年11月10日で、同号巻頭口絵写真「池田厚子夫人をお迎えして」に、「大島青松園栈橋に御上陸」のキャプションつき写真があるが、栈橋はみえない。

『青松』通巻第165号(1961年2月)の表紙写真に、「近く恒久架設と代わる板栈橋の名残り」とのキャプションがつく。同号目次には、「表紙写真<16号台風跡>岩田兼光撮影」とみえる。同号「後記」(署名齊木創)には、「その頃〔春ころか〕、島にも恒久的栈橋が初めて実現する。表紙写真のように台風被害のたびに応急修理の仮橋で永年しのいできたが、今度、運輸省、香川県、庵治村の協力を得て、六百万円近い架設着工をみることとなった。こうして足もとが据わり、島の命脈である船が欠航しなくなれば、それだけ島びとの疎外意識ものぞかれてゆく訳である。」と記されている。このときつくられようとしている「恒久的栈橋」は、大島では「初めて」のものとなる。

同第164号(1961年1月)の巻末に載る「一九六〇年園内10大ニュース／青松編集部抽出」のひとつが、「7、台風16号に襲われ被害甚大。」だった。同第162号(1960年11月)巻末収載の「園内日誌／8月」には、「11〔日〕台風11号襲来被害軽微。」と「29〔日〕台風16号襲来、被害甚大。」と、2回の台風襲来を記録している(42ページ)。この8月29日の台風第16号について同号は、まず表紙にさきにみた同第165号とおなじ写真を載せ(「表紙・写真欄<16号台風跡>岩田兼光撮影」)、その表紙見返しから2ページわたって「16号台風／被害点景の一端」との見出しをつけて、5葉の写真を載せた——「高潮で穴のあいたコンクリート護岸」「壁の破れた家」「雨漏りや波汐吹きをかぶつた後の寮舎」「寮舎周辺の爪跡」のキャプションがつく。

についてはべつに論じる予定。

⁴²⁾ 池田来島を同号「あとがき」に記す齊木はそれが「島でも年々最大の集りとなる」と伝えるとともに、この年は「その席でのお一人から、本誌への御批判があつたことは“頂門の一針”として御留意の程を感謝するものである。」とのべた。これに

巻末「後記」(署名S)のうえには、「廂と窓の吹きとんだ山の編集室」のキャプションと「右の写真は誌面、横一つばいに指定して置いたが、製版所がまちがえて、「ネガ原寸」のまま銅版にした。／従つて台風被害と編集室全景も不明瞭となつてしまつた。」の文章がついた写真を載せ、「後記」の記事もそのおよそ半分の内容を台風が占めた。

領袖一触、写真のように廂を叩き落していつた台風16号の残禍いえきらぬ中から、菊花節の好季を望んで本号を編み終つた。／台風銀座と呼ぶ諷刺コトバが穏やかな瀬戸うち沿岸にまで聞かれる今年は、周期的アタリ年とか予報されているが、自然の猛威と、病気の冷酷非情には末だオ手上げの外ない。私どもは、本誌発行の頃までの台風シーズンを無事にありたいものとヒトエに常識的祈りあるのみ。しかし反面では「台風置土産の真水で久々に茶の味も出ただろう」と見舞状で指摘していた人もあつたように、全く台風を契機に雨の続いた昨今では給水時間も午前、午後の二回に倍加され延一時間となつたので、その意味では台風も天裕とか云えようが、災害復旧には頭が痛いから、プラス・マイナス零(ゼロ)と相なる次第。／上掲の編集長屋は何々屋敷とでも呼べそうな茅屋であり、屋守りの私も在園26年、当主九年の老残なので家、人ともに新しく取代えたいのは独り私のためのみではあるまい。新進気鋭の後継者擡頭を切望する。

——「プラス」もあつたのとらえ方がおもしろい。島の水事情にとっては、台風襲来が好機となるばあいがあった。

『青松』通巻第169号(1961年7月)は、巻頭口絵写真に2ページをあて、そこに4葉の写真を配して、「繫船場」の建設を伝える——「西海岸に大島港繫船場が設けられる事になつた。従来の棧橋

は殆んど木組で台風襲来の際など吹き流されてしまふ状態だつた。今度は鉄筋ブロックで(へ)の字型に突き出し、内側が繫船場になる。＜写真は鉄筋ブロック組立て現場＞」「『繫船場』は総経費六百万円。その内訳は、厚生省二百万円。運輸省、香川県、庵治村が残る四百万円を均等負担する。全長百余米。先端の水深、四米、百トンまでの船舶が接岸可能。この写真が印刷される頃は完成している筈である。＜上下の写真は陸で組立てた鉄筋ブロックをサルベージ船により設計位置に運ぶところ＞」(目次には写真について「青松園西海岸棧橋工事現場」と記載)。

同第213号(1965年11月)の表紙写真(恵美かおる撮影)に、キャプションはない。おそらく、西海岸を南のほうから撮った1葉で、北の山のとまゑに船がみえる。ただ粗い画像からは、船着場の建造物がよくわからない。

『島昭和史』巻末収載「年表 自治会・青松園関係」には、1961年5月16日のこととして、「大島棧橋鉄筋コンクリートに更新」の記載がある(331ページ)。その前々日14日は、「自治会創立三〇周年記念行事行なう(ソフトボール、ピンポン、テニス大会など)」。『青松』通巻第170号(1961年8月)巻頭の「園内日誌」は、5月17日に「協和会創立三十周年記念式挙行。」と記すも、棧橋の記事はどこにもない。ふたつの史誌に記述のずれがある。同第253号(1969年11月)掲載の「過去の10年の動静／各年度・10大ニュースその他」に、1961年5月16日のこととして、「大島港棧橋鉄筋ブロックに更新。」と記載があつた(61ページ)。

このときの棧橋がいまも使われているそれである。いまや老朽化は否めず、また、潮位の高低によって船の着岸に支障が生じるときもある。これまでのわたしの体験では、もっとも潮が高いときには、軽トラックの荷台のうえにさらに踏み台を乗せ、そ

こから乗船したときがあったし、いちばん低いときは、船に乗って着席したところ、窓から外をみる目の高さが岸壁とほぼおなじだったことがあった。この「港湾・棧橋の整備の計画を具体化」することが、園の「施設整備」の継続課題となっている(自治会長森和男「新年にあたって」『青松』通巻第692号、2017年2月、14-16ページ)。2018年の同誌年頭号(通巻第698号、2018年2月)、に自治会会長の寄稿はなく、園長による「新年のご挨拶」(2-3ページ)で「棧橋の問題や医師不足の問題など難しいことも抱えています」とふれられている。

設置から60年を経ようとしている大島の棧橋も、これまでに装いの更新があった。『青松』通巻第553号(1999年12月)の表紙見返しに、「写真・大島棧橋に壁画／撮影・山西勤」の見出しが付き、3葉の写真が載る——「庵治中学校の美術部員と大島の庵治第二小学校の生徒によって、大島棧橋の壁面に「海」の壁画が制作された。高さ1m、幅42m。写真手前、船舶「せいしょう」、絵を描いている児童たち。」「壁画は町教委が企画、庵治中学校に制作を依頼。庵治中学校美術部員の他、卒業生も参加し、8月30日に完成。大島の玄関口を絵で飾り、来島者を温かく迎えよう、と企画されたとか。多くの少年少女たちが、顔や手をペンキで汚しながら描いてくれたことに入所者は感激。」「絵はまるで「夢の海」。虹のような赤や緑の波が漂う海中を、色鮮やかな魚の群れが泳いでいる。タコ、カニ、イルカやクラゲ、海草が元気で楽しそうに遊んでいる。背景は右から矢竹島、中央は女木島。壁画は大島の名所になった。」(なおこの壁画完成は、「協和会日誌」の1999年8月分には記載がない。同第552号、1999年11月)。

また、この棧橋はただ船を着岸させる設備ではなかった。1971年11月20日、「医事及び自治会後援の盲人会ツリ大会を開催する。」(「協和会日誌

(十一月分)」「『青松』通巻第275号、1972年1月、32ページ)、「自治会後援の盲人釣大会を大島棧橋において催す。」(「盲人会年表」『わたしはここに生きた一大島青松園盲人会五十年史』大島青松園盲人会、1984年、329ページ)との記録がある。のちに「写真でみる／過去10年の歩み」(『青松』通巻第353号、1979年11月)に配された写真の1葉についての「説明」が「自治会及び看護助手さんなどの援助による盲人会釣大会実施。／(昭和46年11月20日)」で、さらに「写真でたどる青松園の80年(その3)」(同第452号、1989年11月、36ページ)にも「盲人つり大会。(棧橋)／(第一回は46年11月)」のキャプションつき写真が掲載され、どちらにも鈴生りにという形容がふさわしいほどに、岸壁にあつまり釣竿をもつ人びとがみえる。棧橋はまた、大島の人びとの娯楽の場でもあった。

『青松』通巻第404号(1985年1月、27ページ)の「園内レポート」が「盲人会つり大会」をとりあげた。「<写真説明>冷たい西風を避けながら介助者の手助けを得てツリ竿をたれる盲人会の皆さん。正面が島の西南端で、その右はしが重ね岩と石島である。」(写真撮影野村宏)。1984年10月30日の同会は、午前9時から11時30分まで、あいにく、接近しつつある台風のせい、西よりの冷たい風が大島棧橋に真ともに吹きつけ、防波堤の波よけにうづくまるようにして風を避けながらのつり大会となった。そうしたなか、「参加者は盲人会員約二十名、そして今年も高松から香川県視覚障害者福祉協会から数名の方が参加されたと聞く。／この行事は自治会主催ではあるが、回を重ねるに従って盲人会の年中行事として定着した。そして支援者も福祉室、准看護学校、その他大勢の方の協力も定着した感じで、特に准看護学校生徒が主体で実施されるようになった。[中略] 重度の障害を持つ盲人会の皆さんのつり大会であり、何処

の療園にも見られない行事で、その意義は大きい。もっともっと盛んになることを望みたい。」との希望もみせられていた(さかのぼると、同第396号、1984年2月、10ページ、の「園内レポート」も「盲人会のつり大会。写真撮影坂崎知能)。

「年中行事として定着した。」というこの釣大会について、あらためて「盲人会年表」をみると、1974年11月26日、1977年11月29日(「参加者二十五名。」)に実施記載が、「年表 自治会・青松園関係」には、1971年11月20日「第一回盲人会釣大会実施。」、1979年11月21日(「参加者二三名介助者准看護学校生徒ほか」)の記載があった。

現在ある、官用船のための栈橋と、高速救急艇用栈橋へと改築された栈橋がかつて砂防堤としてのみ用いられていたころのようすを、ひとつの角度から双方を視野に入れて撮った1葉がある(『青松』通巻第395号、1984年1月、表紙見返し)。



さきにみた、『青松』通巻第452号(1989年11月)は、「大島青松園創立80周年記念特集号」を組んだ。そこに掲載された稿のひとつに「<80年の歷程>/船・電気・水・電話」(署名本誌編集係坂崎知能)がある——「島という宿命から船、電気、水の確保は大変だったであろうし、電話のこ一つを捉えても至難のことばかりであったらう。八十年にわたる苦難の道のりを越えてきた、先輩たちの足跡をまさぐり乍ら、その一端をたどってみることにする。」と始まる稿はまず、船の「80年の歷程」をとりあげた(57-59ページ)⁴³⁾。同稿に記された「官有船の歴史」の「参考文献」は、『五十年誌』。まずは出典にさかのぼって、同書の章「概況」の節「九、船舶」をみよう(29-30ページ)。

「初代の「大島丸」1909年4月8日就航、12馬力石油発動機。

「二代目の「大島丸」1919年就航、20馬力石

油発動機。初代、2代めともに「小舟」とのこと。

「第三代の「大島丸」1928年「警察船であつた一九噸の「八栗丸」を譲り受け、これに四〇馬力のエンジンを装備〔中略〕船体が老朽であつたので同五〔1930〕年に庵治村寺岡造船所で一七・三六噸の船体を新造して、四〇馬力エンジンを装備し(後に六〇馬力エンジンを取り替え装備した)第四代の「大島丸」となつた。」。また、この「大島丸」は、昭和二三年一月三日の未明の強風浪のため志度湾東方大串〔屋島、庵治よりさらに東の志度湾東に大串半島がある。現香川県さぬき市〕の岬まで流されて大破したことがあつたが、同二五年迄長期間にわたり療養所の「足」としての重責を果たした。」。同書挿絵に「改装前」「改装後」の「四代目大島丸」写真あり。

「かえで」1935年就航。「終戦直前の昭和二〇年八月四日高松空襲の際、高松の中川に繋留して」いて「戦火のため焼失」。同書挿絵写真あり。

「もみじ」1936年就航。「かえで」「もみじ」は「庵治港との便をとり大島の児童の通学の足となつた」。同書挿絵写真あり。

「松風丸」1939年「もみじ」のエンジンを移して「新造」。高松空襲で「かえで」同様に焼失。

「浦風」「元海軍内火艇〔中略〕昭和二五年までの間、長さ一一米、三〇馬力ガソリンエンジン装備で(後に六〇馬力に換えた)」。この写真が、おそらく、さきにみた『青松』通巻第147号「青松園50年史点景」ページ、見出し「島の足」の1葉——「戦後海軍から払下げの内火艇で、修理して患者輸送用等に使う。(昭和初年頃までは患者輸送船はなく、患者は大島丸の尻に曳船にした伝馬船に乗せられ潮吹きに濡れながら連れて来られたものだ)」とのキャプションつき写真に写る1隻とみてよい。

「五代目の「大島丸」1950年10月5日竣工、長さ16.7m、幅3.6m、30.28t、90馬力ディーゼルエ

43) 坂崎は同稿に「明治42年に開所以来、暗い時代の大正を経て、昭和初年ごろまでの25年間余りは、新入所のときも付添いや面会人も、患者と一緒にでは本船に乗せてもらえず、小さい伝馬船に無理やり乗せられて大島に着いたという。」

(57ページ)と記した。大島をめぐる船の差別についてはべつに論じる予定。

ンジン。同船は「開所以来の大型」とのこと。同書挿絵写真あり。同船の写真はまた、『青松』通巻第107号(1955年11月)表紙(キャプション「高松港を出帆する大島丸」、同誌表紙写真に最初に用いられた船体写真)や、前掲「青松園50年史点景」ページの1葉にある——「(B)昭和25〔1950〕年進水の現在の「大島丸」30噸90馬力定員30名厳守の近年は職員の乗船日も指定されている。」。

「松風」1952年10月29日竣工、長さ12.5m、幅3m、12.5t、220馬力グレマリン64型高速エンジン。同船は「快速力を有し〔さきの「大島丸」と〕共に第六区平水区域航行認可を得ているが、沿岸航行の遠距離航行にも堪え得る船舶」という。同書挿絵に「まつかぜ(現在)」として写真あり。この写真は前掲「青松園50年史点景」ページの1葉の転載——「(A)昭和27年新設の軽快艇「松風」14噸200馬力グレマリン(修理部品が入手できず荒天用特設の性能は半減している)」。

さきの『青松』誌上「官有船の歴史」は、「かへで」を「昭和10〔1935〕年6月1日建造、11噸20馬力(患者輸送船)／この頃の船便は高松行、庵治行とも一日2往復。日曜日は庵治港經由高松行一往復のみ。」と追記し、「もみぢ」についても「昭和12年11月30日建造、噸数、馬力数とも不明。」とするなど、同稿が「参考」とした『五十年誌』に照らすと、記述に違いがあったり、前者にはなかったことがらが後者で追記されていたりする。

なお、「官有船の歴史」が載る『青松』通巻第452号の挿絵には、「四代目まつかぜ新造。／(平成元年3月)」(55ページ)、「二代目せいしょう就航。／(昭和62年4月)」(同前)、「三代目まつかぜ竣工、祝賀の餅なげ。(昭和47年5月)」(36ページ)、「官用船「もみぢ」。／(昭和11年)」(3ページ)のキャプションつき写真があった。

それぞれの記録に、いくらかのずれがみえる。な

るべく同時代の記録をみよう。

「かへで」。1935年6月1日「午前十一時高松市東浜町三木造船所に於て新造したる患者輸送船「かへで」丸の進水式を挙行す。因みに「かへで」は十一噸、廿馬力、エンジン回転数六〇〇回転、速力七浬」(「日記抄」『藻汐草』通巻第15号、1935年6月、52ページ)。1936年4月15日「患者収容ノ為メ“かへで”丸ハ岡山県宇野港ニ向ケ出帆」(「所内日誌抄」同第24号、1936年5月、31ページ)、1936年6月30日「所属船「かへで」は患者収容のため笠岡港まで出張す。」(「大島日誌」同第27号、1936年8月、28ページ)。「患者輸送船」という「かへで」の役割をあらわしてようか。1940年5月19日「所属船かへで修繕完了下渠す。」(「大島日誌」同第71号、1940年7月、目次した)。

「もみぢ丸」。1937年11月30日「新造船もみぢ丸の進水式を午前十一時より庵治港に於て挙行す。」(「大島日誌」同第44号、1938年1月、51ページ)。「大島療養所々属船／もみぢ丸」のキャプションつき写真(同第49号、1938年6月、巻頭口絵)。ここに写る船体は、甲板の前方と後方とで船室が分かれているように見え、また、船尾には日の丸の旗がかかげられている(さきにも「官有船の歴史」稿掲載写真と同一)。

「松風丸」。1941年5月15日「新造船「松風丸」進水式あり」(「大島日誌」同第80号、1941年6月、「目次」した)。同年9月14日「所属船松風高松より帰途、機械破損のため約二時間海上に漂流す」(「青松園日誌」同第85号、1941年12月、25ページ)。同年10月14日「所属船破損修理のため、本日より愛生園「愛生丸」借用運航す」(同前)。1952年10月31日「新造船「松風」十二時四十分着、試運転のうち餅撒。」(「園内日誌抄」十月の動静)『青松』通巻第74号、1953年1月、34ページ)。現在使われている平仮名表記の船名のいわば先代となる

漢字表記の「松風」が、ここに登場した。

「せいしょう」。1968年3月20日「「せいしょう」進水式(於高松市)」「(青松園日誌(三月))」同第238号、1968年5月)。同年3月26日「新造船「せいしょう」が完成。海岸に於いて餅まきを行なう。」(「自治会日誌(三月)」同前)。同第239号(1968年6月)の表紙見返しにある「ペンとカメラの園内散歩」第11回(写真三好節夫、文岡本清)が「せいしょう誕生」をとりあげ、「写真上=満艦飾の「せいしょう」」「写真下=東海岸での餅まき風影」のキャプションつき写真2葉を載せた。そのしたの文章は、瀬戸内海とは言え、高松から十二キロの海上に浮ぶ小島のことですから、船は私も島に住む者の足であり、生活の基本の一つだとも言えるのです。ところが現在の大島丸は、昭和二十五〔1950〕年に進水した木造船であり、使用年限十五年を越える老朽船でした。従つて安全のためにも設備の整つた新造船の誕生を待ちわびていたのですが、関係者の理解を得て漸く昨年度予算化され、総工費一千五万円で鋼鉄船「せいしょう」が誕生したのです。／現在までは大島丸という船名が継承されていたのですが、新造船は、野島園長命名で、この地にふさわしい「せいしょう」としました。今後「せいしょう」は、私どもの夢や希望を、そして悲しみさえも暖かく包摂し、つゝがなく送り迎えしてくれることでしよう。／総屯数三七、一一屯 純屯数一九、〇八屯／船長 一七米 船幅 四、二〇米／機関 一二〇馬力 速力 九ノット／定員 乗客七〇名 船員三名

——現在につづく船名がもうひとつ、ここに登場した。

「<園内ニュース>/新造船船名「せいしょう」に決定」の見出し記事がある(『青松』通巻第406号、1985年4月、28ページ)——「新造船命名につ

いて、公募か、旧名使用かの両論があったが、岡田園長先生の提言で公募することになった。現在の二せきのうち、「せいしょう」を廃船にすることに決定して、公募。選者は岡田園長先生。／結果的には「せいしょう」を採用決定。応募者は一一二人。応募された主な船名は次の通り。(カッコ内は応募人員数)／せいしょう(18) 青松(5) 大島丸(4) あけぼの(3) ちとせ(3) つつじ(3) ことぶき(3) さぎなみ(3) 第二せいしょう(3) せいしょうⅡ(2) ひさご(2) 新青丸(2) 春風(2) 矢竹(2) はやぶさ(2) さちかぜ 高庵丸 ちどり かけはし 青高丸 ふれあい 栄光丸 しおかぜ 相愛 新生 みどり丸 しおじ 青風 憩心丸。／「せいしょう」がええぞ、「せいしょう」がびったり、新しい名前はなじめない、という多くの声が新船名を決定した。古くて新しい船名「せいしょう」は「青松民族」の誇り、というわけ。／新造船は、車椅子で乗降できる自動タラップが自慢。入園者一同、初乗りを楽しみにしている。】。

「新造船の船名募集を行う。」が1985年1月14日、「新造船起工式(於高松市興亜産業造船所)へ岡田園長他園関係者と森副会長、山本代議員会議長の二名出席。」が同月18日、「募集していた新造船の名称を「せいしょう」と命名することを放送で公表する。」が同月22日(「協和会日誌(一月分)」『青松』通巻第406号、1985年4月、42ページ)、「今泉副園長、奴賀係長来所懇談(新造船「せいしょう」による病棟入室者、不自由者の島めぐり遊覧の実施について)」が同年3月6日、「新造船「せいしょう」進水祝賀行事への招待状を本省、支局、地元関係者および山本中執へ発信。」が同月13日、「新造船「せいしょう」進水式(於興亜産業造船所)へ会長、代議員会議長の二名出席。」が同月20日、「執行委員会(新造船進水祝賀行事について)。」が同月22日、「新造船「せいしょう」処女航海を行い、大島棧橋到着。祝賀行事として東海

岸で餅投げを行う。」が同月30日(「協和会日誌(三月分)」同第408号、1985年6月、34ページ)、「新造船「せいしょう」による病棟、不自由者センター入居者の試乗島めぐり実施(第一回)、参加者六一名。」が同年4月9日、「旧「せいしょう」の廃船式。」が同月23日だった(「協和会日誌(四月分)」同第409号、1985年7月)。

『青松』通巻第404号(1985年1月)表紙写真(坂崎知能撮影)にはつぎの説明がつく——「大島は、南北に細長い周囲約四キロの小さい島であり、ひさご型になつたくびれた地区が平坦で、青松園の中核地帯となっている。島の西側が、北西に弁天島や矢竹島、南は石島やアバギの鼻に囲まれた比較的大きい湾になっていて、その中ほどの奥詰めが大島港である。／大島港は、L字型の防波堤兼棧橋があり、その棧橋に停泊しているのが青松園の専用船「せいしょう」(手前)「まつかぜ」(その前)〔その奥、の意〕である。／正面の洋館が大島会館、その左右に鬱蒼と繁るのが墓標の松と言われる老松群である。」(岡本清執筆か)。ここに写る「せいしょう」「まつかぜ」は、どちらも旧船体である。この写真が次号第405(1985年2月)表紙、さらに次号第406号(1985年4月)表紙にも使われる。

そのつぎの同第407号(1985年5月)表紙写真(多田義明撮影、表紙いっぱい船体が入る構図)には、「新造船「せいしょう」が3月20日進水し、4月から就航。鋼船、全長、23・15m、幅、5m、最大速力、12ノット、定員140人、高松までの所要時間は約25分。」との説明がつく。そのつぎ同第408号(1985年6月)の表紙写真(多田義明撮影)は、大島にむかうあたらしい「せいしょう」をとらえる。その見返しの「園内レポート」にも、「写真・新造船「せいしょう」」が載る(撮影同前)——「新造船「せいしょう」進水／新造船「せいしょう」が三月二十日進水し四月一日より就航しはじめた。三月三十日

午前十時頃、新造船は軍艦マーチを奏でながら初めて大島港に入港、出迎えた大勢の職員、入園者にその雄姿を披露した。そして十一時すぎ、東海岸でお祝いの餅投げをおこない、新造船「せいしょう」の誕生を祝福した。／新造船の主要要目は次の通り。／船質 鋼製。用途 旅客船。／主要要目 全長23・15m 幅5m。／深さ2m。／総屯数約48屯。／主機関 ヤンマーディーゼル五〇〇馬力。／最大速力 12ノット。航海速力11・5ノット。／特殊装備 身体障害者用昇降装置、レーダー衝突予防援助装置付、音響測深機。／定員 一四〇人。／予算 九六〇〇万円。／建造所 高松・興亜産業株式会社。／自動タラップは不自由者の乗降のために考案され、船室も、職員、患者の区別を無くしたことは、青松園にとって画期的なできごとである。問題は、その趣旨通りに運用されるか、どうか。新造船の航海と進路に期待したい。／(中石俊夫)。この大島にむかって進む「せいしょう」の表紙写真が、同第409号(1985年7月)、同第410号(1985年8月)にも用いられた。

同第409号の表紙見返しに組まれた「園内レポート」の見出しは「旧“せいしょう”よ、さらば」——「新造船“せいしょう”が四月から就航するようになり、旧“せいしょう”は長い間の役目を終えて隠退し、解体されることになった。／旧“せいしょう”は昭和43年3月20日進水、予算は一、〇〇五万円、命名は当時の野島園長、初めての鋼鉄船であった。初代大島丸が初めて就航したのは開園の年明治42年4月8日、12馬力の石油発動機船。何代か続いた最後の“大島丸”は25年に建造された木造船で、43年“せいしょう”に道をゆずった。庵治便の就航は同じ43年からであり、現在の“まつかぜ”の進水は47年5月11日。／旧“せいしょう”は青松園の足となって、十七年間無事故で走り続けた。43年当時の入園者総数は五九九人、今年四

月現在は四四七人、十七年間で入園者も一五二人減少している。船室も職員席と患者席を区別していたが、新造船からそれも廃止された。時間も、時代の功罪も、船の白波とともに過ぎていった。／4月23日午後2時30分、旧“せいしょう”が島を去ることになり、職員、入園者、そして島の小学校の児童までが棧橋に集り、一人一人テープを握りしめ、別れを惜しんだ。／船は五色のテープをなびかせ、静かに棧橋を離れた〔多田義明撮影のその写真掲載〕。「長い間お世話になりました。ご苦労さまでした」と、退職々員を見送るように、大勢の入園者はいつまでも別れの手を振っていた。／(中石俊夫)」。

「せいしょう」はもう一代、つくられる。同第578号(2002年6月)の表紙見返しに、「新造船“せいしょう”進水」の見出しがあり、そのしたに、写真と文章が載る——「3月19日、新造船「せいしょう」の進水式が建造に当たった広島県因島市の石田造船所において行われました。12時30分から始まった式には、青松園関係者、同じ島内の庵治第二小学校の生徒さんが参加し、3年生の里愛波さんがロープを切って、新「せいしょう」は海に白波を立てながら船出しました。また地元因島市の幼稚園児や中学校の生徒さん、一般の人々が見学に訪れ、ともに誕生を祝ってくださいました。／そして一週間後の26日午後1時30分、新「せいしょう」は大島港に到着。出迎えた入所者、職員にその清々しい容姿を披露しました。新造船の長さは27・8メートル、幅は5・8メートルと、前より少し大きくなったせいしょうは、ストレッチャー・車椅子のまま乗れる船内の広いスペース、また身障者用のトイレなど、入所者の高齢化に合わせた設計になっています。旧「せいしょう」は昭和60年3月に進水しましたが、職員・患者席の別を廃した当時としては画期的なものだったようです。約二十年の役目を終えて島を

去って行きました。ご苦労様でした。／この“せいしょう”の船名は三代目となり“孫”に当たりますが、これからも安全航海の血を受け継ぎ、新たな活躍を期待しています。(藪内真琴)」。

「まつかぜ」。時間をさかのぼると、『青松』通巻第280号(1972年7月)表紙絵が船舶を描く(中村泰旺)。巻頭に「新造船「まつかぜ」進水」の見出し記事(1ページ)とキャプション[「まつかぜ」の進水を祝ってにぎにぎしく餅まきを行なう／(大島の東海岸、望見は海峡を隔てて庵治本土)]の写真(撮影鳥栖喬、文岡本清)——

五月の空はあくまでも青く、静かな海に島影をおとし、行き交う船の響きもものどかさをさそう今日、待ちに待った新造船「まつかぜ」が和歌山の造船所から回送されてきた。白一色の小がらな船体、小さなマストに祝旗をかかげ、白波をケタテて快走する姿は勇しいかぎりだ。／特にこの新造船に寄せる私たちの関心は強い。というのは既報のように、現在のハンセン氏病の常識から言って、船室を職員室、患者室と区別すべきでない、という主張と、幼児や、知識のない外来者が乗船する以上、現段階では区別する必要がある、との園側の主張が対立したが、結論として我々の主張は入れられなかったが、要は、現在までのように、患者ということで差別扱いをするな、ということに尽きる。従ってこのような曲節を経て進水された「まつかぜ」に対する期待はより大きいわけである。／小型ながら性能は左に掲げる通りかなり優秀のようだ。船室も前部のよい場所にとれたし、私たちの医療と生活を高めるために、夢と希望を乗せて活躍してくれることを祈りたい。／総屯数 一八、八八屯／長サ 一二、四メートル／幅 三、五メートル／深サ 一、六メートル／機関 ディーゼルエンジン／出力 二六五馬力／速力 巡航速力 一八ノット／定員 旅客三

○人、船員二人

——同号巻末の「協和会日誌(五月分)」は、11日のこととして、「新造船「まつかぜ」進水し、その祝賀の餅なげを行なう。」と記録した。他方、園側の「青松園日誌(五月分)」には、16日「まつかぜ披露。」とみえる(34ページ)。

ここに3代めにして平仮名表記の船名「まつかぜ」(1972年)が登場し、初代「せいしょう」(1968年)とならんで、こののち40年あまりつづく、いわば、まつせいペア、または、せいまつコンビの2隻配備が整ったのである。

『青松』通巻第448号(1989年6月)の表紙見返しに載る「園内レポート」(文坂崎知能、写真瀬戸口裕郎)の見出しが「新造船「まつかぜ」就航」——「快晴の3月20日、待望久しかった官用船・新「まつかぜ」=写真上=が、主管の厚生省及び財務当局の格別のご理解によってつくり、この日から就航した。／就航に先立ち、野島公園で開催した祝賀会には、藤本孝雄・前厚生相(代理)、平井新・庵治町長、伊達卓三・四国医務支局長から祝詞があり、岡田〔誠太郎〕園長、曾我野〔一美〕全患協会長、中石〔俊夫〕自治会長から挨拶やお礼をのべた。終了後、来賓各位と園、自治会幹部が乗り込み、島の東海岸と西海岸でお祝いの餅投げ=写真下=を行ない、しばし歓声に包まれ賑わった。／「まつかぜ」は高松・武部造船で建造の鋼鉄船。総屯数25t、長さ16m幅4.4m、USA・GM社製445馬力のツインエンジン搭載で、最高速度27ノットの高速船。大島—高松間を従来の約30分から15分と短縮。乗員数は72名とほぼ倍増した。造船に要した費用は五、九七〇万円。／現在、高松へ庵治へ140人乗りの「せいしょう」と2隻で一日7航海をしているが、通勤者が多い上に、利用の頻度が高く、さらに増便が急務となっている。』。同号「協和会日誌 三月」に1989年3月6日「新まつか

ぜ進水式(於高松武部造船所)中石会長、山本議長出席する。』、同月20日「新まつかぜ就航祝賀式(於野島公園)」36ページの記載。

同第607号(2005年5月)の表紙見返しに「新造船「まつかぜ」就航」の見出しがある——「三月二十三日、広島県因島市の石田造船で待望の官用船・新「まつかぜ」の進水式が行われ、入所者・職員、庵治第二小学校生徒ら約三十名が参加しました。また、雨の降る中、地元の幼稚園、小中学生が見学を訪れて下さいました。／旧「まつかぜ」の老朽化に伴い建造された、新「まつかぜ」は総トン数四五トン。長さ十八メートル、幅六メートル、最大速力二三ノットの高速船で、定員八十六名。高齢化に伴い不自由になった入所者のために、車椅子の昇降装置を導入し、客席の段差をなくすなど、バリアフリー化を図っています。船体の波揺れを軽減した安定感のある日本初の三胴型の船で、造船に要した費用は約一億五千万円。／「まつかぜ」は二十六日より大島港から庵治・高松両港を就航しており、「せいしょう」と二隻で一日七往復し、入所者の委託診療・バスレク、職員の通勤、また県内外からの来園者との交流など大切な足となっています。』。「協和会日誌(三月)」には、2005年3月22日「山本会長放送、新造船「まつかぜ」進水式出席とお祝いの紅白饅頭を入所者と職員へ配給することについて。』、同月23日「広島県因島市石田造船KKにおける新造船「まつかぜ」進水式へ執行部2名出席、バリアフリー船として建造、進水。』、同月28日「新造船まつかぜ(3胴型高速船)本日より就航。」と記載(同第608号、2005年6月)。「ふじ」。1974年8月1日「快速艇“ふじ”進水。」(「協和会日誌(八月分)」『青松』通巻第303号、1974年11月、39ページ)。

2018年の時点までをみると、「せいしょう」は3代めまで、「まつかぜ」は5代めまで、つくられた。『青

松』通巻第424号(1987年1月)の表紙写真は、大島の棧橋に停泊する2隻の船を写す(多田義明)。2代め「せいしょう」と3代め「まつかぜ」だ。2代め「せいしょう」と4代め「まつかぜ」の写真が、「園内レポート」(同第448号、1989年6月、表紙見返し、写真瀬戸口裕郎、同第467号、1991年5月、表紙見返し、写真青松園庶務部蔵)にとりあげられた。このうち、「せいしょう」「まつかぜ」2隻の船体とともに『青松』誌上に載ることはない。

「せいしょう」「まつかぜ」の組みあわせも、終わりをむかえることとなる——「厚生労働省は、入所者が通院や買い物の唯一の手段である官用船を高松港と結ぶ航路だけとし、庵治港と結ぶ航路を今年度内にも民間委託する方針を固めた。厚労省は、公務員改革の一環で正規職員の増員は認めないとして平成十年以降は非正規職員の募集をしているものの、給与や待遇などの問題で船員の確保が困難な状態が続いている。今回はその船員不足の解消を図るのが狙いである。／自治会もこれまでは、「島に強制隔離した国が責任を持って運航すべきだ」と反対してきたが、船員が確保できない状況ではやむを得ず、高松航路の増便など条件付きで受け入れる苦渋の決断をした。」(「官用船(大島～庵治)を民間委託へ」『青松』通巻第674号、2014年2月、表紙見返し、「せいしょう」の写真あり)。

ついで間をあけて、「船舶民間委託(庵治～大島)／および運航ダイヤ変更のお知らせ」が『青松』(同第685号、2015年12月、表紙見返し)誌上に載る——「すでに本誌(二〇一四年一・二月号)にてお知らせしておりましたが、[2015年]十一月九日より官用船(大島～庵治)が民間に委託されました。／運航開始後の大島と庵治間は特定旅客航路となり、職員等の通勤専用船となります。その為、許可書の提示が必要となるなど乗船できる方が限定

されますのでご注意ください。／また、大島～高松便につきましては、当面の間、官用船「まつかぜ」のみの運航になり、これまでより一便増便され、一日五便の運航となるに伴い、運航ダイヤが変更となっておりますので併せてお知らせいたします。(大島交通案内参照)」。

ここには、同号発行時にはすでに「大島～庵治便」で就航しているはずの、「しやるまん号」と「バルコソラーレ号」の写真も載る。

この船舶民間委託をめぐるのは、事後に、さきに見た「許可書の提示」云云にかかわって、在園者を訪ねた外来者を庵治便に乗せる乗せないの悶着があったと聞いた。もとより職員の員数を削ってまで来訪者を乗船させることは論外としても、いくらかの融通をきかせるかどうかの適切な判断と説明が、管理者にもとめられることとなる。当面のあいだとはいえ、「せいしょう」よりは乗船定員の少ない「まつかぜ」のみの運航とするとは、園への、大島への来訪者の数を少なく見積もっていることとなる。もっとも、2018年9月の時点で、施設見学の人数が多いときには、「せいしょう」を就航させることもあり、渡島をめぐるのは適切に対応していると園側は説明するのだろう。在園者数も減れば、彼ら彼女たちに会いにくるひとたちも減る、だから大人数を運ぶ船を定期便に組みこむ必要はないということか。では、島の「振興」はどうするか、と問うときには、いわゆる足(船)の確保と足場(棧橋)の整備が不可欠だとなる。

2018年9月に在園者と話していて、船は「患者収容船」だったからあまりいい思いはない、と聞いた。島のだれにとっても、船が足となるにはずいぶんと時間がかかっている。

16 | 貯水池

1938(昭和13)年に香川県土木課の事業とし

て、南の山の中腹に貯水池の新設工事が始まる。山の周囲にめぐらせた総延長3.5kmにおよぶという集水路から集まる天水の容積は1万4500 m³が見込まれ、それで100日分の給水ができると計算された貯水池が翌1939年に完成。島の水事情改善にむけた転機となる。その後、庵治と結ぶ海底送水管が1965年に設置され、四国本土からの給水が初めて実現する。

気象庁が「平成30年7月豪雨」と命名した(2018年7月9日気象庁予報部報道発表)、「前線及び台風第7号による大雨等」について、高松地方気象台が同年7月9日18時時点での「気象速報」として発表した「平成30年6月29日から7月8日にかけての台風第7号と前線による大雨について／(香川県の気象速報)」では、「三豊市財田では降り始めからの総雨量(6月29日08時から7月8日13時まで)が488.0ミリを観測し、また7月1日から7月8日までの降水量は400.0ミリとなり、7月の月降水量第1位を上回る大雨となりました。／この台風及び大雨の影響で、香川県内では、負傷者3人、床下浸水3棟、住家の一部損壊7棟などの被害が発生しました。／【被害状況は、香川県調べ：7月9日09時現在】」とのこと(気象庁ホームページ2018年9月8日閲覧)。

このとき、大島では大きな被害はなかったものの、7月11日の訪島時にみた貯水池は、あふれるばかりの満水だった。これほどに水がたまった貯水池をわたしは初めてみた。その後も猛威をふるった台風第12、20、21号によりどれほどの水がたまったか、わたしは貯水池を確認していない。

他方で、『青松』通巻第140号(1958年11月)が表紙見返しに載せた写真には、「干上つて給水塔の露出した貯水池」のキャプションがつく。そのつぎのページには「水不足の大島風景」の見出しのもと、「時間給水の順番を待つ人達」「重病棟へ飲料水を配達する運搬車」(「運搬車」はリヤカー)

「重病棟の常水タンクに水を注ぐ消防ポンプ」のキャプションつき写真が4葉載る。満水と渴水と、島の水事情はどちらに馴染みが多かったか。

本資料紹介シリーズ(1)の「09井戸」でみたとおり、『島昭和史』巻頭口絵写真には、島の水事情をめぐる3葉を配したページがある。キャプションはうえから順に、「塩分少ない飲料井戸に集まる水貰い／渴水期の煎茶用水は山際井戸だけが頼りで49年香川用水導入まで続いた風景」「不自由者寮の洗面用水甕(昭和35年撮影)／水道設備後も朝夕20分給水で貯水を要した(炊事用水甕は寮内に置いていた)」「寮舎間井戸の手押しポンプ(現存の一基)／塩け水で洗濯は盥10杯ぐらい必要で水汲みだけでへとへとに疲れた雑用水井戸」。これらの写真は、うえから順に、上記「水不足の大島風景」の1葉、「開園六十周年記念特集号」の同第253号(1969年11月) 掲載「写真でみる／過去10年の動き」にあった1葉、『島昭和史』編纂時に撮影か。史誌や逐次刊行物の創立記念号において、島の水をめぐる写真の掲載は不可欠だったといえよう。

『青松』誌上ではまた、通巻第161号(1960年10月)巻頭の「園内スナツプ」と題された2ページのうちの1ページに、うえからしたへ順に、「一日30分の給水なので、不自由寮側のこの水甕も必需品である。」(これは上記同第253号掲載写真におなじ)、「僅かな水槽の貯水で沢山の食罐洗いをしている患者作業。不自由者看護の隘路はこうした不便さにもある。」(手押しポンプが写る)、「夫婦寮などでは施設の不備を自力で改善しようと、作業賃でプロパンガスを買って据えたものもある。」のキャプションつき写真を載せた。

時間をさかのぼって島の水事情をみよう。『藻汐草』通巻第36号(1937年5月) 掲載「大島日誌」には、1937年「三月廿七日／川口内務技師、武井土木技

師、土田衛生課長水道施設実地視察のため来島す。」との記述がある(23ページ)。

ついで同第53号(1938年10月)の巻頭口絵写真のキャプションが、「八万石貯水池新設工事の現場」。つづく文章は、「大島の南部、山の中腹へ貯水池が新設されることになりました。この写真はその工事中です。実際完成後は、これ以上の深いもので、右方、人の立つてゐる処は水面上層部となる筈で、満々たる水がたたへられてゐる様が今から想像されます。この工事については、県当局の並々ならぬ御尽力により、今年度中に完成、来年度中には給水可能の予定であります。/(十三年九月十八日写)」。

同号には、大島療養所長野島泰治の「水と電気」が載る(2-4ページ。「水道貯水池成らん」と「電気完成」の2節)――

夏になると、井戸水が塩分が多くて飲めないとの苦情は毎年聞かされることで、水道の計画は年来の懸案であつた。対岸または高松から水船で運搬する方法、島の適当な場所にボーリングをやつて水源とする方法、さては海底に鉄管を敷設せんとする方法等々、各専門家につきいろいろの研究をした結果最後に到達したのが、現在の天水利用の水道である。/水道工事は、今明年の継続工事で、今年貯水池だけ造ることになつてゐる。貯水池だけといつても土堰堤の高さ一米、長さ一〇一米、天幅三米、満水面積四、一九五平方米、約一二〇〇坪、容積一四五〇〇立方米約八万石の大工事である。/本工事実施に就いては、多度津測候所の過去三十年間の雨量を詳細に調査して、人口一二〇〇人に対し普通一日一人宛約六斗〔約108リットル〕、最大八斗の給水が出来得る様計画されたものである。即ち、集水面積約六万坪に降つた雨量の最底三%が貯水池に溜る計算で、貯水

池に一度満水すれば八万石溜るのであるから、三ヶ月間雨が降らなくても一日八〇〇石として、一〇〇日間の普通給水が出来る筈である。/これはしかし計算であり計画である、実際問題としては工事に変更の個所もあるであらうし、また天水の事であるから天候次第で雨量の少ない年もあるであらう、水道が出来ても水節約の今の気持ちだけは、いついつまでも持つて居て戴き度い。/工事に就いて困難して居ることは、何んといつても支那事変時局の拡大と、物品統制の影響の大なることである。しかし幸にも、この物価旋風に際会しても工事中止の憂目を見ないで済んだことは、香川県土木課の直営工事としてやつて戴いてゐる御蔭であつて、感謝に堪えないところである。

――国立移管まえの連合県立の時代ゆえ、この事業は、「香川県土木課の直営工事」としておこなわれた。同第55号(1938年12月)の巻末「編輯後記」(井村生)は、「救癩事業の拡張としては、〔中略〕わが大島は、来年度の拡張に先立ち、電灯工事が完成し、水道工事も着々進捗しつつある現状である、」と報せた(34ページ)。

「第一期水道工事終了の直前」のキャプションつき写真が、『藻汐草』通巻第57号(1939年2月)の巻頭口絵写真となつた。そこに配された文章は、大島の南部、山の中腹へ貯水池が新設されることになりましたことは、野島所長の玉稿並に工事現場の写真(共に十月号所載)によつて既にお報せ致しました。/この写真は第一期工事終了の直前に撮りました。かくも工事が順調に進捗致しましたことについては、県当局の並々ならぬ御尽力によりました。/(昭和十四年一月三十日写)

――ただし、こののち、同誌掲載の「大島日誌」「青松園日誌」における貯水池の記述は、1941年8月

まで飛んでしまう。じつは、いつ工事が終了したのか、かならずしも明確ではないのだ。1939年8月発行の同第61号の「編輯後記」(46ページ)で、その冒頭に「大島では、こゝ二ヶ月余りも雨が降らないので、井戸水に塩気がさして来ておます、雨が是非ほしい此頃です。」と記されたり、所長名で執筆され「年頭に際して癩新発足を語る」(同第76号、1941年1月、2-3ページ)と題された稿に「上水道さへ完備せんとしてゐる。」と告げられたりしてしまうと、さきの「工事終了」予告から2年を経ようとしていなおまだ貯水池が機能していなかったり不完全だったりのこととおもってしまう。

国立移管(1941年7月1日)後に「青松園日誌」と題目がかわったページの1941年8月の項に14日「夜半より風強く、風速相当なるものにて、二十米以上と推定され、警備のため在島職員全部に非常召集あり」、翌15日「重症室の患者移転、貯水池の警戒並集水路の清掃作業、患者地帯防波堤の倒壊箇所警戒等に職員を非常召集して当らしめる／開所以来の暴風雨なるも人畜に死傷なくも、被害相当あり／電信、電話不通、電灯故障のため全島くらし、患者、保育所、各部宿直員にローソクを支給す」(同第83号、1941年9月、19ページ)との記録がある。さきにみたとおり、1939年1月30日付で撮影された写真に添えられた文章に、「一期工事終了の直前に撮」ったとあるのだから、それからそう日数をおかない1939年のうちに工事は終了し(ただし第1期分)、その翌々年の「開所以来の暴風雨」にさいしては、職員が貯水池を警戒することとなったのだろう。

『五十年誌』収載「年譜」の1937年から1941年をみると、貯水池をめぐるのは、1937年3月27日のこととして、「当所水道施設計画につき内務省土木局水道主任技師河石協介氏、県武井技師および土田県衛生課長来所。」(46ページ)があるだけ

だった。『五十年誌』(1960年)と同時期に発行された『青松』通巻第151号(1959年11月)に載る「国立療養所大島青松園年譜【編集部作製】」には、1939年の「130 八万石見積り貯水池構築水道第一期工事完成近し。」の記述があり、さきの『藻汐草』の記事を参照したと推測できる。『島昭和史』巻末「年表 自治会・青松園関係」では、「八万石見積り貯水池構築、水道第一期工事完成近し。」とのできごとが、1939年「1・20」のこととして記されている(320ページ)。これは誤植か転記の誤りである。

第1期というからには第2期がありそうだが、それがいまのところよくわかっていない。それはともかくも、貯水池ができたことによっても大島の水事情は十分な改善が達成できなかったようだ⁴⁴⁾。

『青松』9月号(1955年9月)の「潮音」と題されたページにあるふたつの節のひとつに「鑿井の試掘のゆくえ」の題目がついている(齊木創執筆。6-8ページ)——「水飢饉は大島の代名詞のように有名になっているが、用水不足の現況について今一度具体的に書いてみよう。」と始まった箇所では、「園内使用量は一日約千二百石であるが、その中、唯一の淡水である山腹の貯水池は年間三カ月しか貯まらず、一日四百石乃至四百五〇石を給水して居る上水道は殆んどがグラウンド横に掘られた三本の補助井戸(塩分多量)から送られて居り、これが飲料、風呂、ボイラー、消毒、石鹼溶解用だけに使われ、後の不足分は四十数本の寮舎附属の井戸から殆んど海水に近い水を、ストンガツチャンと病人の手で汲み上げ、洗濯を初め大部分の用水に当てているのである。」とのこと。

それが、「一昨年頃から前記補助井戸の塩素が急激に増加し、其の上、水量もとみに減つたのでまづい上水にも事欠ぐ仕末となり、特に塩素含有量は一三〇〇mgに増加し、普通飲料水の二〇mgに

44) 大島ではこのち、上水道設備工事や海底送水管設置がおこなわれることとなる。それについてはべつに記す。

比らベケタ外れの悪水となつた為、ボイラーにも注げぬ計りか、最早口をゆがめても飲料には我慢のならぬ辛らさとなり、そのせいか眼病や胃腸を患う者が近年めつきり増えたりするので、窮余の一策として飲料水だけは山添いの旧鶏舎の古井戸を復活し、其所から作業人により各療にバケツ一杯当を配達することにしたのである。」という。この「復活」井戸がいまもある「古井戸」である。

こうした事情をふまえて、「鑿井」の「試掘が去る六月の末頃終了した。」との報告がこの稿の主旨なのである。第1次調査では、確かに「飲料水として差し支えない」水がでたのだが、「水量測定の点に於いて請負業者が約束を守らず余りにも短時間しか調査していなかつた為、遊水か湧水かの判定が未だ不十分である。と云う理由で本掘りの採否決定はその後に持越されることとなつた。」との顛末が伝えられた。

【附記】

本稿は、2018年度科学研究費助成事業基盤研究(B)(一般)「近現代日本における病者・療養者の生」(研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也)による成果のひとつである。